
灰かぶり王子

秀介。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰かぶり王子

【Zコード】

Z82150

【作者名】

秀介。

【あらすじ】

むかしむかし、とある国にシンデレラといひ名の少年がありました。した。

しかし、彼の本当の名は、別にありました。

彼は、亡国の王子でした。

むかしむかし、とある国には一人の王子がありました。

近々、王子の婚約者を決めるための舞踏会が開かれます。王子は

そのことをよく思つていなく、そして王子には、ある重大な秘密があつたのです。

1・亡國「ミックティール王国」

此處はペテロアーヌ王国の下級貴族の暮らす平和な町、アリアス。吸い込まれそうな青空の元、小さな屋敷の庭で一人の古いドレスを着た、パー・マがかつた綺麗な金髪の“少年”が、洗濯物を干していた。彼の名前はシンデレラという。

そう、あのシンデレラである。彼にはかの童話の少女と同じように、継母と二人の義姉がいる。そして同じく、三人にこき使われていた。

彼がかの童話の少女と違うのは、性別だけではない。彼は王家の血筋であった。王家といつても、この国の、ペテロアーヌ王家の血筋ではない。

今は出稼ぎに出ている父とアーリイは、今では地図に載ることのない、ミックティール王国といつ亡國の王家の直系であった。

アーリイは、シャイン大陸の5大王国　今では4大王国だがの一つで、とても平和な国の王家の生き残りだった。

ほんの8年前まで、アーリイは王子だつた。

彼の父は王と呼ばれ、国が滅んだことを気に病み、そのままこの世を去つた母は妃と呼ばれていた。

ミックティール王国が滅んだ原因は、その隣国リリアン王国にあつた。

ミックティール王国の隣に位置するリリアン王国は、面積も人口も生産量もミックティール王国がかなうこととはなかつた。リリアン王国

の上級貴族の世帯数だけで、ミシティール王国の人口を上回った。

そんなリリアン王国には、大国だからこそその唯一の問題点があつた。

それは経済格差である。

支配階級である上級貴族は多いが、被支配階級である農民や漁民はその数を大いに上回る。

その代わりミシティール王国の経済格差はほぼ臨無といってよかつた。

皆が平等に財を分け合つ社会が成立していた。

支配階級は自分の管理する被支配階級が財を無くせば財を分け与え、被支配階級同士、支配階級同士でも同じことがいえた。

王家が金を湯水のように使つこともなく、王は自ら貧しい民に財を与えた。

しかしリリアン王国の王家はその真逆で、金を湯水のように使い、財政が困難になると多額の課税を国民に強いた。

2・大国「リリアン王国」

リリアン王国の最下層の被支配階級たちのその怒りは、リリアン王家ではなく皆が平等で平和な隣国へと向けられた。

計画は着々と進んでいた。ミシティール王国の王家も国民も、誰もその計画に気が付くことはなかつた。

計画が実行されたのは夜だつた。

その夜城では舞踏会が開かれていて、王家のの人間や貴族たちが優雅に踊つていた。

最初に異変に気が付いたのは、国境の小さな農村に住む農民だつたはずだ。その農村を統治する男爵が、城に転がり込んできた。

『隣国の農民たちが、攻め込んで参りした!』

血まみれの領主が這う這うの体で城に転がり込んできたときは、ドレスを着た貴婦人が一人悲鳴を上げた。

その後は日が回るようになにに城から皆が逃げ出した。こつそりホールに出てきていた当時13歳だったアールイは、タキシード姿の紳士に見つかって手を引かれ走り、そして。

城は見る見るうちに炎上し、紳士はアールイを庇い倒れた。アールイは紳士の遺体を一度だけ振り向き、走つて走つて、命からがら逃げ出した。何とか逃げおおせていた両親に再会し、大好きな母に抱き着いた。

そして、同盟国であつたこのペテロアーヌ王国まで逃げてきたのだ。

ミッティール王国は、隣国の農民たちに全てを盗まれ、全てが燃え尽き、生き物が死に絶えた。逃げ出した者を追いかけて来ることはなかつたので、命からがら逃げ出した者も多数いた。しかし少數の人間は、あの紳士同様死んでしまつたのだ。

その後は、ミッティール王国襲撃のきっかけとなつたリリアン王家が何食わぬ顔で介入し、ミッティール王国の領土を我が物顔で独占した。

アーリイの父親は公爵から男爵へと成り下がり、アーリイの母親は國が滅んだショックで寝込みそのまま帰らぬ人となつた。そしてアーリイの父は男爵家の末亡人と再婚し、出稼ぎに出て今に至る。

3・少年「シンデレラ」

ふう、とアールイは安堵の溜め息をつき、腰に手を当てた。

「…終わった……」

洗濯物を干し終わったアールイは、洗濯物の入っていた大きな籠を持つて屋敷の中へと入っていく。

屋敷といつても、そこまで大きくなはない。とはいえ、屋敷という区分ではそういうが、農民や漁民の家に比べれば大きい。そしてアールイが5年前まで暮らしていた城は、この小さな屋敷より比べ物にならないほど大きかった。

アールイは浴室にいた。四つん這いになつて、泡の付いたスポンジを片手に風呂掃除をしている。

「あーもう面倒くせ

とは言いつつも、手を抜くことはしなかつた。

母が死んで、父が再婚してからこの5年間は、アールイの生活を大きく変わった。

城にいたときは20人ほどいた使用人も、今では一人もいなく自分が使用者の「ご」とき扱いを受け、しかもシンデレラ（灰かぶり姫）と呼ばれている。

いくら髪を切る暇がなく伸びた髪が綺麗な金髪で、黙つていれば美少女のようだとはいっても、あんまりである。

アールイには劣るがかなりの美貌を持つ継母が、嫌みと妬みを込めて付けたあだ名であった。

アールイの背後で、物音がした。

「シンデレラ、お風呂掃除は終わったかしら」

アールイが振り向くと、そこには腕を組んだ継母が立っていた。

「ぬつせーな。今やつてんのが田に入んないんですか？オカーサマ？」

アールイはスポンジを持つてない方の手で鼻の下を擦り、上田遣いで継母を睨み付ける。

「ああ、お田が悪いんでしたっけ。あと俺の名前は“灰かぶり姫”じゃなくて“アールイ王子”だつーの。ついでに頭もお悪いんじやないんすか？クソババア！」

継母は美しくプラチナブロンドを揺らし、キッ、ヒアールイを睨み付けて、

「田も頭も悪くないわよー馬鹿にしないでよシンデレラの分際で生意氣ねーー！」

と吐き捨てるどバンーーと勢いよくドアを開めて浴室を立ち去った。

「…だーから俺の名前はアールイだつのは

まだ5分の1も掃除が終わらない広い浴室で、アールイは一人咳いて掃除を再開した。

4・今月末の「舞踏会」

この日、アーリイの機嫌は悪かつた。

「チツ」

アーリイは昼食の買い物から帰ると、買い物籠を台所に置いて溜め息をついた。

近々、王子の結婚相手を決める舞踏会がある。年頃の娘たちが浮き足立つ中、アーリイは近くに住む娘たちに、

『シンデレラは王子様と結婚するんでしょう?』

『シンデレラが舞踏会に行くなら私たちに勝ち目はないわね』

と笑われた。

その娘たちを無言睨み付け、アーリイは舌打ちして帰ってきた。舞踏会は今月末に開かれる。王子の結婚相手を決めるために、國中の年頃の娘たちがござつて、あの城壁に囲まれた城下町へと足を運ぶのだ。

王子は大層な美貌の持ち主だという。王子と結婚すれば、玉の輿で、王家に名を連ねることができ、何といっても美しい王子を独占できる。一石二鳥だ。

しかし王子は女に興味がないのか何なのか、どんなに美貌を持つ女が誘つても、一切手を出さないそうだ。巷では「男色趣味なのでは」という噂が流れている。

そこへ先ほどの娘たちの台詞である。アールイにとつては、まさに「冗談ではなかつた。アールイにそんな趣味はないのだから。

ペテロアーヌ王国に住む年頃の娘たちは皆、舞踏会で王子の田に止まるために美貌を求める。上級貴族の娘たちはエステティシャンやマッサージ師、針子を雇い、この辺りに住む下級貴族の娘ですら新しいドレスを仕立て屋に頼んで作らせる。

そして勿論。

「シンデレラ、舞踏会のために新しいドレスを仕立てて頂戴」

アールイが昼食を作つと買つてきた材料を籠から出していると、一人の女がやってきた。

「あ？ んなモン近所の仕立て屋にやらせりよ」

仕立て屋に頼む金がないなんてはずがない。下級とはいえ貴族なのだから。

「だつて舞踏会が近いからみんながみんな仕立て屋に行くんだもの」

腰に両手を当てて当たり前のようこそいつづつ言つてのけるのは、アールイより一つ年上の継母の次女だつた。

5 アーリイの「才能」

「んなこた知らねえよ」

肩に掛かる、母から譲り受けたプラチナブロンドを右手で払い、義姉はアーリイを見据える。

「あなた何でも出来るんだから、ドレスくらい作れるでしょう？」

「レベハ、とおまかれてくれるものである。」

城では油分であるなど考へもしなかつた料理や裁縫の才能を」の

5年間で見事開花させた。

しかし、いくら才能があるとはいっても、普段の家事だけでくたくたになるのである。そこへ、あと一ヶ月もない舞踏会のためにドレスを作ることを加えたら、寝る時間がなくなってしまう。

アーリイは義姉とはいえ、他人のためにそこまでする勤労奉仕の心を持ち合わせてはいなかつた。

「俺はあんたらの召使いじゃねえんだよオネーサマ」

「何よー・シン・デ・レラのくせにー・！」

「うるせーよ。キイキイ騒ぐんじやねえ。あんただけ眉メシ抜きに

九

まさに売り言葉に買い言葉。アーリイは義姉に包丁を向けた。

「うー…とにかく…ドレスは作つてもいいわよ…」

怯んだ義姉は半歩ほど後退り、捨て台詞を吐いて台所を後にした。アールイは義姉が今まで此處にいたのが嘘であるかのようにドジしらえを始めた。

そして、この日の夜。

「…美味しいか?」

そう優しく微笑んで、黒猫に手でミルクをやつているのはアールイだった。それは継母たちには決して見せない表情だ。

この黒猫がミッシーティール邸にやつて来たのは半年前だ。

アールイはその日、継母に言われて近くの仕立て屋に頼んでたドレスを取りに行つた。

『…幾らだ?』

『十五フランでござります』

アールイは帰り道を急ぐ。家へ帰つても仕事はまだあるのだから。

四年もやつていると、家仕事が板についてきたアールイである。クオリティが上がり、速度が上がった。アールイはミッシーティール家の料理人であり家政婦であり針子であった。

6・「運命」か「必然」か

『みいー』

そんなアールイの帰り道。風の音や婦人たちの話しそうに混ざり、聞き覚えのない“音”がした。

『みいー』

まだ。いつも通っている道である。まるで何かの鳴き声のような、そこまで考え、アールイは一つの可能性に思い至った。まさか。

アールイはその“音”的する方へ歩いていく。アールイの予想は見事的中した。そこには一匹の赤い目をした黒い子猫がいた。否、捨てられていたのだ。

『みい？』

『捨てられたのか？可哀想に。ついてこいよ。ミルクでもやる』

そう言つてアールイは黒猫を抱き上げて撫でた。アールイは黒猫にクリスティーヌと名付けた。愛称はクリス。屋敷に帰ってきたアールイはクリスにミルクをやつた。

最初は怖がっていたクリスも、半年経つた今では見事アールイになついている。

「クリス、」

名を呼んで撫でてやれば、クリスは返事をするように「みいー？」と鳴き、アールイの手に頭を擦り付ける。

「なあクリス、俺の味方はお前だけだよ」

五年前、アールイは大切なものをたくさん失った。家であつた城

を失い、居場所であった「王子」という立場を失い、大好きだった母を失い、そして。

「リズは今頃…何してんだか」

言つて、自嘲気味に笑つた。

リズとは、アールイの許嫁であつた少女の名前だ。少女というより王女といった方が語弊がないだろう。いずこの国の王女かも知れない。幾つもあつたミッディール王国の同盟国のいずれかの国の王女だろうということしか分からぬ。当時アールイは政には一切関わつていなかつたから、父が家にいない今となつては分かる術はない。

リズと最後に会つたのは9年前、アールイが9歳のときである。最初に会つたのは確か5歳のときだつたとアールイは記憶している。最後に会つたのも最初に会つたのも、ミッディール城であつた。

7・回想「出会い」

『アル？あなたの可愛い許嫁さんに「はじめまして」は？』

アーリイはリズに初めて会つたとき、同じくらいの年の子供しかも女の子に会つのは初めてだつたから、何だか気恥ずかしくて母の背中に隠れた。

『……は…はじめまして』

顔を真っ赤にして、恥ずかしさで泣きそうになりながら、小さな声で漸く挨拶が言えた。

『はじめまして、アーリイ王子』

子供ながらもさすが王家の女と言ひべきか、ドレスを持ち上げ、優雅にお辞儀をする少女の姿にアーリイは壁のようなものを感じた。

『私はお父様のところに行くわね』

アーリイはそう言つて立ち去る母のドレスを一瞬だけ掴んで、優雅な足取りで歩いていく母の後ろ姿を見つめていた。

はあ、という安堵の溜め息が聞こえてきて、アーリイは許嫁に向き直つた。

『大人がいるとつかれるわ。それもたこくの王家となるとすんごくつかれる』

それが母の悪口に聞こえ、アーリイは何か言いたげな顔をするが、それを全く気にする様子のないリズが言つた。

『ねえ、私あなたのことアル、つて呼んでもいい？』

ニパツ、と、太陽のように笑つた少女に、アーリイは今度こそ本当に泣きそうになりながらも、コクンとうなずいた。

『私のことはリズつて呼んでね、アル』

5年間の人生の中で、母にしか呼ばれたことのない愛称で女の子に呼ばれ、アールイは恥ずかしさで目が涙でいっぱいになつた。

「リズ…」

思い出すと泣けてきた。母もリズも、違う意味で手の届かない存在になつてしまつた。母はもう一度と会えない。そしてリズには違う意味で会えないのだ。今となつては「王子」という立場に未練はない。しかしリズとの唯一無二の接点が断たれてしまつた以上、リズに会うことは許されないので。

向こうは王家。そしてこちらは貴族は貴族でも男爵家だ。男爵家の子息が一国の王女に会う機会などたがが知れている。そしてそれを普通「会う」とはいわない。アールイはリズを遠くから「見る」とことしかかなわないのだ。そう考へると、涙が止まらなかつた。

8・幾つかの「謎」

「ん…」

アールイはベッドに倒れ込んで声を殺して泣いた。そして、嗚咽が聞こえなくなつたかと思えば規則正しい寝息が聞こえてきた。

「みやー」

クリスはベッドから降りると、アールイの部屋から出た。部屋の外には継母のアテナがいた。

「彼を眠らせるなんて困った猫ね」

「みい？」

クリスは意味が分からないとでもいつかのように首を傾げた。
「惚けたつて無駄なんだから。彼は今日はもつ田を覚まさないんでしうう？ディッシュー」

アテナは、今は眠っている黒猫の飼い主が付けた名ではない名で、黒猫を呼んだ。それが“彼女”的本当の名前だとでもいつよひ、「それが当たり前のように呼んだ。ディッシュー、と。

「みやー」

黒猫も当たり前の「ごとく、それに返事をするかのように鳴いた。
「いらっしゃいディッシュー」

アテナは両手を前に差し出す。黒猫はアテナの腕に飛び込んだ。
「ご飯をあげるわ」

アテナは先ほどのアールイとはまた違つた優しさを孕んだ声で、胸に抱いた黒猫に話しかけた。

此處で数時間前に遡る。アールイは夕食の片付けをしていた。

そのほぼ同時刻の、ペテロアーヌ城のことである。

「セイル様、夕食の準備が整いました」

一人の侍女がある部屋でその部屋の主である男に丁寧に礼をした。

「ああ、今行く」

声変わりが来ていってもおかしくない年齢ではあるが、未だ幼さを残した声で返事をしたこの部屋の主、その人こそペテロアーヌ王国の第一王子にして次期ペテロアーヌ国王セイルである。

「ん？」

9・「濡れ羽色」

セイルは窓に異変を感じ、そのまま窓を開けバルコニーに出た。

「…ああ、お前か」

そこには赤田の鳥がいた。鳥はセイルの声に応えるかのように「アーカー」と一声鳴いた。

やけに人馴れした、今にも夜闇に紛れてしまいそうな濡れ羽色の鳥は、白く小さいものをくわえている。この鳥がセイルの元を訪れるのは初めてではない。鳥がくわえているのは手紙だ。

『セイル王子へ』で始まるこの手紙の送り主が誰かは分からない。しかし敵ではない。それだけは分かる。

セイルはこの怪しそうな手紙を侍女や近衛には見せずに自分の事務机の引き出しにこいつとしまい込んでいた。

鳥が此処へ来るのはこれで2回目だ。

鳥が運ぶ、差出人不明の謎の手紙。今回の手紙の内容に目を通し、セイルはにやりと口角を上げた。

セイルにとって、とても都合の良い内容だった。

これが本当ならば、セイルは最終手段を取らずに済むだけでなく、もう絶対に手に入らない、手の届かない場所にあると思っていたものが手に入る。彼にとってこの手紙は後者の意味の方が遥かに大きかった。

セイルは飛び去る鳥を眺めながら、先程侍女が来た理由と両親を待たせていろうことを思い出して、たつた今届いた“郵便物”

を事務机の引き出しの奥に隠し、自室を後にして

10・夜明けの「悪夢」

まだ夜も明けきらない、静かな朝。

「ちよつとー・シンデレラ・シンデレラ・何処にいるの？」

否、このミシティール邸には女の叫び声が響いていた。継母の次女であるジャンヌが、騒々しく屋敷の廊下を駆け回る。

ああ…もううるせえ。

ジャンヌの声で目が覚めたアールイである。朝から騒々しいことこの上ない。ベッドから起き出しカーテンを開ければ、空はオレンジと紫のグラデーション。アールイは出窓を開け放す。2階の窓から身を乗り出す。庭にいる鶏の1羽が、寝ぼけているのか「コケ？」と一聲鳴いた。あれは確かアリスだ。ふと時計を見ればまだ朝の4時だった。

そういえば。

いつの間に眠ってしまったのだらう。寝ぼけた頭を無理やり起こし、昨夜のことを思い出す。

そうだ。

昔のことを思いだしていたら、急に睡魔に襲われて。それで、眠ってしまったのか。

ドアの外から聞こえてくる足音が段々大きくなっている。アールイがそのことに気付いた次の瞬間。

「まだ寝てたの！？ほら早く脱いで！！」

ドアが勢いよく開いて、大きな声で呼ばれたアールイは耳を塞ぎたくなつた。

この距離でその声はねえだろ……。

げんなりするアーリイに は重ねて叫ぶ。

「早く脱ぎなさい、つて言つてるでしょ！？」

アーリイはジャンヌに対し、恋愛感情や性的欲求を感じたことは一切なかつたが、しかしそれでも、此処は一応男であるところのアーリイの部屋であり、義姉ではあるが一応異性であるところのジャンヌと二人きりな状況なわけで。

どう考へても間違いが起きるとは思えなかつたが、何故か躊躇してしまうアーリイである。

「何で脱がなきゃいけねんだよ」

「あなたに頼みがあるの」

何だこのめっちゃ イイ笑顔。 ヤな予感しかしねえ。

「コツ、ヒ効果音が付きそつた程綺麗に笑う義姉の姿に、アーリイは悪寒がし冷や汗を搔いた。ぞりつ、と後ずさつたアーリイは、自分の後ろには出窓しかないことを知つていて。コツン、ヒ、靴の踵が壁に当たつた。

げつ。

絶体絶命。みるみるうちにアーリイの顔は青ざめていく。口はまるで魚のようにパクパクと開閉を繰り返し、首は幼子が「イヤイヤ」をするように左右に繰り返し振られている。

「ちよつ、マジやめ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8215o/>

灰かぶり王子

2011年4月17日20時39分発行